

『狐ライナールト物語』の冒頭における改変について

檜 枝 陽 一 郎

中世オランダ語による動物叙事詩である『狐ライナールト物語』は、1479年にオランダのゴータにおいて印刷業者のヘラルト・レーウによって出版された。印刷術が低地諸州へ導入されて間もない頃のもので、ごく初期の印刷本のあり様を研究するうえで格好の作品である。

この時期の印刷本には、まったく独自の発案による新規の作品というのは滅多になく、ほとんどの場合、写本の形で残っていた先行するオランダ語やラテン語、フランス語の前作を典拠としている。たとえば『狐ライナールト物語』は、15世紀の第2四半分期に成立したとされるやはり中世オランダ語による『ライナールト物語』にじかに依拠したものである。ただし印刷本の場合は、不特定多数の読者に購入してもらうことを前提としているので、そこには読者の注意を惹きつけるためのさまざまな工夫が施されている。韻文から散文へ移行したこともその一例であって、それ以外にも語や文の省略や追加、語の入れ替え、文の組み替えなどさまざまな改変が施された。

両作品に関するこれまでの研究は、韻文から散文への移行が『狐ライナールト物語』およびそれ以降の続編にとって最も重要な特徴だと見なして、それ以外のさまざまな変更が十分に考慮されてきたとは言い難い。¹⁾最近ドイツで出版された研究書が以上の点に配慮した唯一のものだと言えるだろう。²⁾ただ、両作品の本文を仔細に比較してみると、数多くの省略や添加、語の入れ替えなどの改変が行われており、これらすべてを俎上に載せて論じることは実際には不可能に近く、上記の研究書にしてもそれは例外ではない。それでも数多くの変更には、たんに韻文を散文に変えるという目的だけでなく、それ以外の一定の意図があってなされたことを窺わせる。そうでなければ変更そのものがなされなかったであろう。本論は、『狐ライナールト物語』の本文と『ライナールト物語』の対応箇所をできるだけ詳しく比較して、そうした一定の意図とは具体的にどのようなものであったのかを明らかにしようとした。作品の全編にわたって比較検討するのは、紙幅の制限もあって不可能であり、本論の意図するところでもない。それゆえ本論では、『狐ライナールト物語』において序を含めて冒頭から第六章まで、すなわち熊のブルーンによる第一の呼び出しの前までを考察対象とした。物語の出だしの部分は、作品全体の舞台設定をどうするか、あるいは登場する各動物の関係をどう設定するかなど、物語の基調を決める重要な部分をなすと考えられ、その基調を明らかにするのを本論の目的とした。

本論の関心にかかる部分のあら筋をまず述べておきたい。物語は、聖霊降臨祭のある日の出来事からはじまる。春うららかな季節に、百獣の王ノーベルが諸侯会議を執り行おうとして全国に告知させると、大小の動物がこぞってやってきた。狐のライナールトだけは参内しなかった。やってきた動物たちのなかで、ライナールトを訴えない者は狐の甥である穴熊のグリムバルトだけであった。ライナールトに対するさまざまな訴えが切り出され、まず最初に訴えたのは狼イセグリムとその親族、つぎに子犬のコルトワが腸詰めを盗まれたと訴えたものの、雄猫ティベールトによる反論にあって訴えは却下される。さらに海狸^{ビーバー}のパンツァーが、兎のクワールトに狼藉をはたらいたとし

てライナールトを告発する。これらの訴えに対して、ライナールトの甥である穴熊グリムバールトが反論してライナールト弁護に回る。しかしながらその最中に、雄鶏のカンテクレールが殺害された娘のコッペを担架に乗せてやって来て、王様に窮状を訴える。王様はコッペを埋葬させてから、顧問団のお歴々と協議したうえで、ライナールトの召喚を決定する。

(1)序の刷新

『狐ライナールト物語』の序と、前作である『ライナールト物語』の序を比較すると、序が刷新されて共通する部分がほとんどないのが判明する。本来、物語は中世においては読むものではなく、聞くものであった。誰もが貴重な写本を所有していたわけではないので、吟遊詩人などが聴衆に語って聞かせたのである。韻文による『ライナールト物語』の序を検討すると、聴衆の注意を喚起するために古典的な修辞法であるトポスが随所に使われており、序が物語の導入部分としての機能を果たしているのがわかる。³⁾出だしの数行を引用すると以下ようになる。「たびたび夜更かしをして、マドックを制作したウィラム。彼は、ライナールトの足跡が適切に書かれていないことをはなはだ遺憾に思っていた。一部が未完のままであった。そこで伝記を探させて、フランス語の諸本から以下のようにオランダ語に訳しはじめた。(RH 15:2-4;1-9)」⁴⁾冒頭から「マドックを制作したウィラム。」というように、ウィラムなる作者が自分自身のかつての作品を伝えるのは、聴衆に期待を抱かせるための自己宣伝であり、トポスである。また、「たびたび夜更かしをして」と作品が出来上がるまでの困難を語るのもいわゆる困難のトポスであり、中世における決まった言い回しにほかならない。⁵⁾さらに、作者がこれまでの作品に満足していないことを伝えるのもトポスであって、『ライナールト物語』はこうして随所で中世の物語作法に従っている。ウィレムは序の後半で、物語を制作するように依頼した宮廷夫人がいたからこの作品ができたと述べているものの、これも中世の作品にはよく見られる決まり文句であって、じっさいこうした夫人が実在したのかは不明である。⁶⁾『狐ライナールト物語』と共通する部分は、序の末尾にある「なかに数多くの知恵があることを覚えておかれよ。」という、作品の有用性を述べた箇所だけである。

他方、『狐ライナールト物語』の序は、不特定多数の読者を考慮して全面的に書き換えられた。現代の書物に見られるように、序はまず「ここに狐ライナールトの物語または様々なたとえ話がはじまる。」と書名をあげて、つぎにその内容を紹介する。⁷⁾物語には「たくさんの素晴らしい教訓や大切な戒めが種々のたとえ話によって」記されているのだという。その目的あるいは読者にとっての効用は、社会の各層で「実践され活用されている巧妙な計略を知ること」であって、善人の役に立ち、利益になるように、また悪人に騙されないように作られていると本の有用性が強調されている。読者が『狐ライナールト物語』を購入して得られるであろう効用を強調するのは、本の宣伝にほかならない。本を制作した印刷業者のヘラルト・レーウにとって、なるべく多くの人に本を購入してもらうのが最も重要なのである。それと同時に、序の後半が読者にとっての読み方の手引きになっているのが注目される。完全に理解したければ、何度も読んで読んだことに気をつけなければならないとか、正しい意味や正しい意図がわからないなら、何度も通読すべきだとか訴えるのは、まだ本を読む習慣のなかった読者層への手引きにほかならない。⁸⁾また、それは言外に、読者に向けて本文を読みやすく手直ししていると語っているのに等しい。序の最後は、「とても愉快で有益でもあ

ります。」とされ、物語の娯楽性と効用がいま一度強調されている。レーウがこの物語をどう考えていたかを如実に物語る箇所である。『ライナールト物語』の受容は、聴衆が朗読されたものを聞くことで実現し、その序はそうした受容方法に相応しく随所にトポスを交えながら作られていたのに対して、『狐ライナールト物語』では中世の伝統的な序文が破棄されて、できるだけ多くの読者の注意を惹くために、本の娯楽性や効用を強調する序に変えられた。

(2)冒頭の改変

物語は、春うららかな季節の聖霊降臨祭のある日に起きた出来事からはじまる。いわゆる自然描写によって物語を開始するのは中世ではよく見られる方法で（独語 Natureingang）、同時にそれはラテン語による修辞法の一つである「快適な場所 locus amoenus」とも関係している。『ライナールト物語』の冒頭は以下のとおりである。

RH (16,2-5;45-60)

「聖霊降臨祭のある日のことであった。森や野原に、若葉や草の新緑が映え、多くの鳥が楽しげに垣根や樹上でさえずっていた。草は芽を吹き、花々はあたり一面に香っている、晴れて澄んだ一日であった。百獣の王ノーベルは諸侯会議を全国に告知させた。首尾よくいけば、絶大な称賛を浴びながら全諸侯会議を執り行おうと考えたから。すると王様の宮廷には、ただ一人狐のライナールトを除いて、大小の動物がこぞってやってきた。」

「快適な場所」の定義上の構成要素は、R・ファン・ダーレ van Daeleによれば緑なす野原および香る花々、さらさら流れる小川ないし泉、花咲く木々、歌う鳥たち、そよ風あるいは晴れた天気の内六個だといふ。⁹⁾ 上の自然描写には、さらさら流れる小川ないし泉を除くすべての要素が揃っており、先のラテン語による修辞法を援用したのがわかる。他方、『狐ライナールト物語』の自然描写は以下のとおりであって、各要素は必要最小限にまで短縮されている。さらに「森や野原」が「森」だけとなり、「晴れて澄んだ一日」という文言も省略された。

Pg (206,13-207,1; 7,1-8)

「聖霊降臨祭のころであった。いつも森が喜びにあふれている季節であった。香る若葉や満開の木々、花々や鳥たちのさえずり。この季節に高貴なる百獣の王は、時機よろしく聖霊降臨祭の日に立派な諸侯会議を執り行おうとして全国に告知させ、すべての動物が参集するように厳しく命令させた。すると宮廷には、狐のライナールトを除いて、大小の動物がこぞってやってきた。」

こうした冒頭の自然描写は、トポスとして多分に修辭的なものであるため、個々の構成要素の有無を論じてもさほど意味はない。しかしながら、『狐ライナールト物語』の作者が、前作で見られたような修辞法重視の姿勢をとっていないことは明らかである。さらに、こうした改変の主要な目的は、RHで冒頭から見られる押韻を解消することにあつた。RHにおいて韻を踏んでいる二語 (dach/sach、grass/wass、bomen/bloemen、daer/clear) のうち Pgで残る語は bloemen (花々) だけで、他の

語はことごとく削除されている。¹⁰⁾ 押韻を解消するには、韻を踏む一語を残して他の一語を削除するか、別の語に代えるという方法もある。それをせず、大幅に単語を入れ替えて物語の出だしを大きく変更しようとする意図が窺える。

自然描写の内容をみると、RH では物語が「聖霊降臨祭のある日のことであった。」と切り出され、それは「晴れて澄んだ一日」の出来事でもあったという。それに対して Pg では、聖霊降臨祭のころのことであり、「いつも森が喜びにあふれている季節」であった。物語がある特定の日時に起こったのではなく、毎年訪れる季節に起こったことだと日時をことさら特定しない、一般的な時間が設定されている。一般化する傾向は、百獣の王についても確認できる。諸侯会議を全国に告知させたのは RH では「百獣の王ノーベル」であるのに対して、Pg ではたんに「百獣の王」とされた。こうした改変のもっている読者への効果としては、冒頭から物語により感情移入ができるようにするためである。しかし、Pg では物語の出だしをこのように一般化したためにもう一度日時の特が必要となり、RH にはない「時機よろしく聖霊降臨祭の日に」との一文が繰り返されて冗長な印象を与える結果となった。他方、「首尾よくいけば、絶大な称賛を浴びながら全諸侯会議を執り行おうと考えたから。」という RH の条は、押韻のために添加された箇所であるため、Pg では省略されて代わりに RH にはまったくない「(百獣の王が) すべての動物が参集するように厳しく命令させた。」という、王様の威厳を強調した一文が挿入された。

王様が諸侯会議を招集すると、大小の動物がこぞって宮廷にやってきた。ただしライナールトだけは参内しなかった。興味深いのは、ライナールトが参内しなかった理由が両作品では異なることである。

RH (16,5-8;61-70)

「彼は宮廷でたくさん悪事をはたらいたので、あえて来ようとはしなかった。悪をおこなう者は光を避ける。聖書はまったく正當にこう語っている。宮廷で酷評されていたライナールトも、そうしたのである。みながこの諸侯会議に参集したとき、赤髭の非情なライナールトを訴えなかったのは、穴熊を除けば誰もいなかった。」

Pg (207,1-3;7,9-13)

「彼は、やってくる沢山の動物に対して罪の自覚があったので、あえて来廷しなかった。王様がこうして諸侯会議に全員を招集したとき、ライナールトを猛烈に訴えない者は、ただ一人穴熊を除けば誰もいなかった。」

「悪をおこなう者は光を避ける。」という聖書からの引用に当てはめると、¹¹⁾ RH では悪をおこなう者がライナールトで、宮廷が光を象徴するという図式となる。それがストーリーのなかで正しいかどうかはさておき、Pg ではライナールトが参内しないのは、やってくる沢山の動物に対して罪の自覚があったせいだとされる。ライナールト対宮廷という対立図式が、ライナールト対他の動物という図式に転換され、宮廷は対立の埒外に位置するように変更された。他の動物に対しての罪が具体的に何なのか説明がないものの、第2章以降に語られるライナールトがはたらいた多くの狼藉を指すのだろう。ライナールトが罪を自覚していたとするのは注目に値する。物語ではしばしば非情で悪辣、残酷な狐の話があるので、その後の展開とは異なる設定がなされているからである。この図式の転換はすこぶる重要に思われる。物語のさまざまな局面においてライナールトとその他の動

物との関係をはっきりと決定づけた転換であり、その結果悪役としてのライナールトが明確に打ち出され、それに対抗する形で穴熊グリムバールトの叔父を弁護する姿勢が際立つことになった。

(3)悪役としてのライナールト

大小の動物がこぞって宮廷にやって来て、王様の御前で訴えはじめると、RHでは「赤髭の非情なライナールトを訴えなかったのは、穴熊を除けば誰もいなかった。」とある。ところがPgでは、「ライナールトを猛烈に訴えない者は、ただ一人穴熊を除けば誰もいなかった。」と、訴えが猛烈であったことと、穴熊を除けばライナールトが孤立無援であったことが強調された。それにつづくイセグリムの訴えにも同様の傾向が見られる。イセグリムが王様に憐れみを求めたのは、ライナールトが彼に加えた甚だしい侵害についてであったが、Pgではライナールトが彼とその妻に加えた理不尽で甚だしい侵害となり、それが理不尽なものであったと補足されている。それにつづくライナールトの潔白宣誓の約束についても、ライナールトの悪辣さが強調された。

RH (16,14-16;89-95)

「と申しますのも、日取りが決められてライナールトが潔白を証明する予定にまでなりましたが、聖遺物が運び込まれた途端に、ライナールトは考えを変えて、われわれの所から根城に逃げ帰ったからです。」

Pg (207,8-10;7,24-8,4)

「さらにまた、この場で日取りが決められて、合意の上でライナールトが潔白を示す予定にまでなりましたが、聖遺物が運び込まれた途端に、ライナールトは考えを変えて、突然ふたたび根城に逃げ帰ったのです。」

Pgを読む限り、ライナールトは潔白宣誓をするのに合意したにもかかわらず、突然ふたたび根城に逃げ帰ったことになっている。注意すべきなのは、「合意の上で」および「突然ふたたび」という文言は新たに挿入されたもので、それによりライナールトの約束破りが強調されていることである。

また、コルトワが冬にライナールトによって腸詰めを盗まれたと訴え出たのに対して、雄猫のティバールトが反論する。

RH (17,5-8;118-121)

「親愛なるわが君、王様、貴方がライナールトにあまりに好意的なので、宮廷には老若問わず、貴方の御前で訴えない者などいないのです。」

Pg (208,4-6;8,21-23)

「わが君王様、ライナールトが貴方の不興を買っているところでは聞いています。それゆえこの場には、訴えない者などいないのです。」

王様がライナールトにあまりに好意的で、各々の動物が訴えるのは王様の責任でもあるのに対して、主語がPgではライナールトに変えられ、宮廷で不興を買っているのは彼自身の責に帰せられて

いる。同様に、海狸のパンツァーが、クワールトに狼藉をはたらいたライナールトを糾弾する箇所でも、ライナールトを物語上ことさら悪玉に仕立てようとする意図が見てとれる。

RH (18,10-12;172-177)

「念を押して申し上げます、わが君王様、貴方の平和令がこれだけ破られたのを今回報復せずに、家臣たちの助言通りに裁判を行わないなら、ご子息たちも今後長年にわたって称賛されないでしょう。」

Pg (209,9-10;9,15-19)

「疑いなく、わが君王様、貴方の平和令をこれだけ破った彼を優遇して、家臣たちの進言どおりに道理を通さないとしたら、ご子息たちも長年にわたって責められるでしょう。」

前者の場合、副文内の主語は平和令であり、受動態で書かれている。ところがPgになると、副文内の「貴方の平和令をこれだけ破った」の主語はライナールトであって、その悪行がより際立って表現された。このように、Pgではふつうに読んでいたのでは見逃してしまいそうな一語が添加されていたり、文構造が変えられたりしている。それらはいずれも一定の方向に沿って改変されたもので、端的に言えばライナールトと他の動物との対立図式を強調し、あわせて宮廷をこうした対立関係の埒外に置くものである。

対立の図式がライナールト対他の動物に転換されたとすれば、狐の甥である穴熊グリムバルトのライナールト弁護にもその影響が現れているはずである。確かに、グリムバルトは弁護のなかで他の動物を悪し様に告発する一方で、より強い調子でライナールトを弁護し、狐と他の動物の敵対関係がいっそう鮮明に描かれる結果になった。とくにグリムバルトは、狐の仇敵である狼イセグリムに対して激しく非難するとともに、いっそうライナールトを無実の者に仕立て上げようとする。穴熊によれば、イセグリムはライナールトを攻撃的な歯を使って何度も侮辱して、赤っ恥をたびたびかかせ、叔父はこんな災難と抑圧をイセグリムから受けたのだという。¹²⁾ それに対してPgにおけるグリムバルトは、イセグリムがライナールトを攻撃的な歯を使って何度も引き裂いて、うまく説明できる以上に何度も何度も苦しめ、叔父はこんな抑圧を何度も繰り返しイセグリムから受けたのだと陳述する。¹³⁾ ライナールトが受けたという被害が「侮辱」と「赤っ恥」から「引き裂き」へと程度を強め、「災難と抑圧を受けたこと」は「抑圧を何度も繰り返し受けたこと」にされた。また、ライナールトが自分の女房に狼藉をはたらいたとイセグリムが提訴した一件についても、グリムバルトは「イセグリムが切れ者なら、止めていたでしょう。」とRHで語るのに対して、Pgでは「イセグリムが切れ者ならば、この件ではどんな訴えもしないのが当たり前でしょう。やめておくべきでした。」と、訴えの不当性をことさら強調する。¹⁴⁾

仇敵のイセグリムに対してのみならず、叔父のライナールトに向けられた子犬のコルトワの批判にもより激しく反論するグリムバルトが登場する。ライナールトに腸詰めを盗まれたというコルトワの訴えに穴熊はこう反論した。

RH (20,13-15;264-268)

「コルトワが先ほど、苦勞して美味しい腸詰めを手に入れたと訴えましたが、訴えは却下するのが一番でしょう。そうです、しっかりお聞きでしたか、それは盗まれたものです。彼はどんな学校で

も習いませんでした。」

Pg (211,2-4;10,34-11,3)

「コルトワが先ほど、苦勞して食糧がほとんど得られなかった冬に腸詰めを手に入れたと訴えました。彼は沈黙した方がよかったです。彼は盗んだからです。」

RH では韻律の関係で、Pg にはない「美味しい」や「そうです、しっかりお聞きでしたか」が入っている一方、Pg ではより分かり易く説明するために「食糧がほとんど得られなかった冬に」という関係節が添加されている。また「訴えは却下するのが一番でしょう。」という文は前行と、「それは盗まれたものです。」の文は後続する行と韻を合わせるために受動態で書かれている (Myt pinen een goede worst/Die clage die wair best geuorst/Ja hoordi wel sy was gestolen/Hi en hads geleert in genre scoleu 265-268 行)。¹⁵⁾ 散文における語の選択は、こうした押韻の必要がないために自由である。重要なのは、語を自由に選べる状況でどのような方向性を物語に付与するかであって、Pg では「彼は沈黙した方がよかったです。彼は盗んだからです。」に変わり、グリムバルトのコルトワに対する反論が明確に打ち出され、ライナールトとその他の動物との対立図式が端的に表現された。狐はその甥のグリムバルトにとっておなじ一族に属する親族であって、弁護して当然の尊い正義の男なのである。¹⁶⁾

RH (21,3-5;286-293)

「宮廷で提訴されているとはいえ、ライナールトは曲がったことが我慢できない正義の男です。ですから彼は悪を憎んで、聴罪師の指示通りに暮らしています。というのも、王様が平和令を周知してご公示されてからは、誰も獲物としていないからです。」

Pg (211,10-12;11,14-19)

「宮廷で提訴されているとはいえ、叔父のライナールトは尊い正義の男です。曲がったことが我慢できず、悪を憎んでいます。聴罪師の指示以外は何もしません。申し上げますが、わが君王様が平和令をご公示されてからは、決して誰かに危害を加えようなどと思いません。」

グリムバルトがライナールト弁護の最後に、叔父のライナールトがいまは隠者となって清い生活を送っていると述べる条である。グリムバルトはまず、叔父が尊い家柄の正義の男だとその身分の高さと正義を主張する。「尊い edel」は新たに添加された形容詞である。RH で言うところの「聴罪師の指示通りに暮らしています。」さらに「誰も獲物としていないからです。」よりも Pg での「聴罪師の指示以外は何もしません。」また「決して誰かに危害を加えようなどと思いません。」といった表現の方が、より強い弁護を表現しているのが分かるだろう。

(4)過去の事件の現在化

ここでいう「過去の事件」とは、先行する作品群で言及された物語のなかでのさまざまな事件を指している。たとえば、狼イセグリムのライナールト提訴は、唐突になんの脈絡もなく持ちだされたように見えるものの、提訴の内容は、中世フランス語による『狐物語』に描かれた事件と密接に

関連している。前作に遡るそうした事件が RH を介してどの程度まで Pg に反映されているかを、イセグリムの訴えの全文を以下に引用しながら検討したい。

RH (16,10-17-2;74-107)

「イセグリムが開口一番に話した。『わが君王様、親愛なる君、貴方の高潔さと栄光にかけて、また正義と恩寵によって、ライナールトがわたしに加えた甚だしい侵害をお憐れみください。あまりの屈辱と深刻な被害を何度となく蒙りました。何よりも奴がわが良妻を誑かし、また寢床にいる子供たちに小便をかけて虐待したことをお憐れみください。それ以来誰もが目が見えず、みな盲目となりました。それ以外にも奴はその後わたしを嘲笑しました。と申しますのも、日取りが決められてライナールトが潔白を証明する予定にまでなったのですが、聖遺物が運び込まれた途端に、ライナールトは考えを変えて、われわれの所から根城に逃げ帰ったからです。わが君、以上は当宮廷にいらっしゃる名士の方々がいまでもご存じです。ライナールト、あの非情な動物はわたしを次から次へと苦しめました。貴方に語り尽くせる者はいません。ええ、ヘントで作っている布地がぜんぶ羊皮紙であっても、書ききれないでしょう。このことは当分まだ黙っていきましょう。ただ、わが女房への辱めは沈黙するわけにはいかず、償いと報復なしには済みません。』」

Pg (207,5-13;7,16-8,11)

「イセグリムは親族とともに王様の御前に歩みでて話した。『親愛なる慈悲深きわが君、わが君王様、親愛なるお方、貴方の圧倒的な威厳と正義にかけて、また深い慈しみによって、狐のライナールトがわたしと家内に加えた理不尽で甚だしい侵害をお憐れみください。奴は家内の同意もなく家内に来て、寢床にいる子供たちに小便をかけて虐待し、その結果誰もが目が見えなくなりました。さらにまた、この場で日取りが決められて、合意の上でライナールトが潔白を示す予定にまでなったのですが、聖遺物が運び込まれた途端に、ライナールトは考えを変えて、突然ふたたび根城に逃げ帰ったのです。親愛なるわが君、王様、以上は当宮廷にお集まりの名士の方々がご存じです。さらに奴はそれ以外の多くの件でもわたしを次から次へと苦しめました。貴方に語り尽くせる者はいません。このことはこの際黙っていきましょう。ただ、わが女房に与えた屈辱と不名誉は償いがなければ沈黙するわけにはいかず、報復なしには済みません。』」

イセグリムは、できるだけライナールトを悪者に仕立て上げ、同時に自分の訴えが正当であると宮廷にいる者たちに納得させようとする。あまりの屈辱と深刻な被害を何度となく蒙ったのだという。雌狼への暴行とその子らへの虐待に関するイセグリムの告発は、『狐物語』の第一詩篇「ルナールの裁判」(ライナールトは『狐物語』ではルナールという)にじかに由来する。「あまりの屈辱と深刻な被害を何度となく蒙りました。」という RH の一文は『狐物語』に直接の典拠がなく、新たに挿入されたものである。とはいえ『狐物語』の随所に、イザングラン(『狐物語』ではイセグリムはイザングランという)に対する様々な狐の狼藉の話があるので、これらを指しているのは間違いない。¹⁷⁾ この一文は Pg ではそっくり削除された。

RH によれば、イセグリムの具体的な訴えとは、ライナールトが自分の家内を誑かし、子供たちに小便をかけて虐待し、盲目にしたことだという。このイセグリムの告訴自体は『狐物語』の第一詩篇に由来するものの、これらの事件はもともと『狐物語』の第二詩篇に語られた話である。ルナールが狼イザングランの住んでいるほら穴に偶然やって来ると、ちょうど牝狼のエルサン夫人は出産

したところであった。エルサンは喜んでルナールを迎え入れて、高々と尻尾をかかげてルナールを受け入れ、今やエルサンはルナールの情婦となった。その後、ルナールは仔狼たちの上に小便をひりかけ、寢床の外へひきずり出して、さんざんいたぶった。それからルナールはほら穴から去っていった。イザングランが帰ると、ルナールの狼藉を見て怒り心頭に発するも、エルサンの弁明に一度は怒りを鎮めた。後日、イザングラン夫妻がルナールを発見して追跡すると、ルナールは根城のモーペルチュイへ逃げ込んだ。エルサンが堅固な砦へ突入するも、穴の途中で身体が引っ掛かって身動きがとれなくなり、それを見たルナールはエルサンを手込めにした。¹⁸⁾

イセグリムが良妻を誑かしたと語っているのは、この最後の事件を指している。イセグリムは、ライナールトが彼の女房を誑かした事件と、寢床にいる子供たちに小便をかけて虐待した事件を同じ場所で起こったこととして提訴した。しかし、虐待の場所はイセグリムの館であるほら穴であり、そこでライナールトは狼の女房と性交渉をもった。雌狼のエルサン夫人も喜んで狐を迎えた。他方、ライナールトが雌狼を手込めにした場所は自分の根城のモーペルチュイであった。イセグリムは、現場が異なる二つの事件をあたかも同じ場所で起きたかのように語っている。それはとりもなおさず、狼の女房がライナールトを喜んで迎えたという、自分にとって不都合な事件を表沙汰にしたくなかったからである。

他方 Pg では、ライナールトが狼の女房を誑かした一件が削除された。代わりに「奴は女房の同意もなく家に来て」と、ライナールトが雌狼の同意もなく家に来たと告発の理由が変えられた。とすると、Pg の前行にある「狐のライナールトがわたしと家内に加えた理不尽で甚だしい侵害」というのは、とくに雌狼に限って言えば、ライナールトが同意もなく家に来たことか、同意もなく家に来て寢床にいる子供たちに小便をかけて虐待したことを指すほかない。雌狼がライナールトと性交渉を持った一件も、手込めにされた事件も言及されていない。物語のその後の筋立てを考えると、イセグリムがライナールトに結末で決闘を申し込むのは、自分の妻への侮辱に報復するためであるので、狼の女房への侵害やイセグリムの発言の末尾にある「わが女房に与えた屈辱と不名誉」という一文は不可欠である。ところが実際は、雌狼への侵害ないし屈辱、不名誉と考えられるべき手込めにされた事件が削除されている。¹⁹⁾ 明らかに Pg には、『狐物語』に遡る事件と一線を画そうとする意図が見られ、筋立てに必要な部分だけを残しているという印象を受ける。それ以外の、もはや新しい読者には理解できなかつたり、関連づけるのが難しい部分は削除されたのである。

ライナールトの潔白宣誓の話がこの告発の後に続く。それはイザングランの策略で、『狐物語』第五 a 詩篇にある話によると、ライナールトが手を置こうとした聖遺物は番犬ローネルの牙であったという。²⁰⁾ 女房がルナールから辱めを受けたことをイザングランが宮廷の国王に訴え出て、ルナールには自分の潔白を証明すべき日取りが決められ、聖遺物が用意されたという。ところがその聖遺物とは、死んだふりをした獵犬ローネルの牙であった。ルナールが聖遺物に近寄ってきたときに噛みつく算段をしていた。これを察知したルナールは策略をかわして逃げていったという。²¹⁾ RH が語るイセグリムが受けた「嘲笑」とは、聖遺物が運び込まれた途端にライナールトが根城へ逃げ帰ったことを指している。ただし、「それ以外にも奴はその後わたしを嘲笑しました。」の一文はもともとの『狐物語』にはなく、イセグリムの受けた侮辱を強調するために RH で添加された部分である。妻や子供たちが侮辱され、そのうえ突然ライナールトは根城に帰り、またしても侮辱されたのだという。²²⁾ この部分が Pg では削除された。イセグリムが侮辱されたことを和らげるためでも、『狐物語』との整合性を回復するためでもないだろう。この場合、前作との関連を断ち切って、新たな物

語の筋立てを用意しようとする意図があったのだと考える方が自然である。

こうした先行する作品からの訣別や新しい読者への配慮がイセグリムの訴えに確認できるなら、当然訴えに対抗する穴熊グリムバルトのライナールト弁護にも相応する変更が認められると想定してよい。グリムバルトは弁護のなかで、イセグリムがおこなったライナールトに対するベーコンの分配での酷い仕打ちを明らかにする。イセグリムがベーコンを独り占めにしたので、ライナールトが得たのはベーコンが懸かっていた縄だけであった。

RH (19,17-20,1;221-229)

「また脂っこくて美味しいベーコンの時もそうでした。すっかり胃袋に飲み込んで、ライナールトも取り分を要求して食べたがると、嘲笑してこう応じました。『ライナールト、麗しき若者よ、ベーコンが懸かっていた縄だ、噛んでみる、じつに脂が乗っているぞ。』と。」²³⁾

Pg (210,6-8;10,9-14)

「また脂っこくてとても美味しいベーコンの時もそうしたのです。自分だけ腹に詰め込んで、叔父のライナールトが取り分を要求すると、さらに嘲笑してこう応じました。『ライナールト、麗しき若者よ、喜んで取り分をやろう。』」

つぎのような塩漬肉の話が『狐物語』の第五詩篇にある。²⁴⁾ ルナールとイザングランが共謀して、首に塩漬肉を掛けて運んでいた百姓をペテンにかけて塩漬肉をせしめようとする。ルナールが足を引きずって歩いて百姓に自分の後を追わせると、百姓は息が切れて歩けなくなって塩漬肉を地面に投げ捨てる。イザングランがそれを失敬して、分け前をもとめたルナールには塩漬肉を括っていた紐しか渡さなかったという。²⁵⁾ RHの「ベーコンが懸かっていた縄」というのは、明らかに『狐物語』の「塩漬肉を括っていた紐」から採られたものである。ただそれは、新しいPgの読者には『狐物語』の当該の話を知っていることを前提としなければならず、そうでなければ「ベーコンが懸かっていた縄」とは唐突すぎて何のことか理解できない。読者に特定の知識を前提とすることを避けるために、この箇所は削除された。Pgでは「ベーコンが懸かっていた縄」が削除されたために、結局ライナールトは何ももらえず、割に合わなかったと話に変更されている。

次例も、グリムバルトのライナールト弁護のなかにある条である。

RH (20,3-4;236-238)

「ライナールトは、こんな災難と抑圧をイセグリムから受けました。それにもっと苦しいことも二度ありました。」

Pg (210,10-11;10,18-19)

「ライナールトは、こんな抑圧を何度も繰り返しイセグリムから受けました。」

「それにもっと苦しいことも二度ありました。」という一文は、RHに先行する『狐ライナールト譚』を見ると、どの写本でも「二度」ではなく「百度」となっている。²⁶⁾ 「百度」が本来の読みだとすれば、それは『狐物語』第一詩篇のルナールの懺悔のなかにある「そればかりか、魚売りの荷車の前で、まんまとペテンにかけたこともあります。奸知にものを言わせて、百度も置き去りにして、痛めつけました。」と関連するだろう。²⁷⁾ ただし、『狐物語』では加害者がルナールで、被害者はイ

ザングランないしその弟のプリモーであるから、加害者がイセグリムで被害者がライナールトとなっている RH とは正反対である。これは『狐ライナールト譚』の作者が意図して逆転させたと思定されている。²⁸⁾『狐物語』は「百度」が具体的にどんな悪行を示すのか言及していないものの、ルナールが懺悔するように、イザングランにさんざん悪事を働いたことを指したものだだろう。RH の文脈で二度もあったという「もっと苦しいこと」は具体的に何を指すのかは不明である。『狐物語』に精通している読者がいたとしても、「百度」が「二度」に変更されているせいでこの箇所は理解できないと思われる。²⁹⁾したがって、先行する『狐ライナールト譚』あるいは『狐物語』における事件を連想させる文が、Pg では削除されたと見るのが妥当であり、「こんな抑圧を何度も繰り返しイセグリムから受けました。」とあるのは、グリムバールトが弁護のなかでライナールトの蒙った災難のひどさをたんに強調したのだらう。

(5)舞台設定の現在化

前述した潔白宣誓の場面においてその日取りが決められたのは、本来は『狐物語』における国王の宮廷においてであった。一方、イザングランの一族郎党とルナールの一派が裁判のために集合した場所は、獵犬ローネルが飼われているある村であった。「われわれの所から」とは具体的には両陣営が集結した村からという意味である。Pg ではこの箇所に「この場で hier」が添加され、「われわれの所から」が削除された。もはや『狐物語』における国王の宮廷への示唆はなく、Pg の物語上の宮廷における話へと舞台設定が変えられ、さらに RH の「われわれの所から」が削除され、『狐物語』との連関が断ち切られている。その結果、もともと『狐物語』に由来するこの話も、前作から切り離され、潔白証明も証明を行うべき場からの逃避も、Pg という物語世界の内部で生じたような印象を与える。Pg という一つの物語世界への読者の取り込みと言ってよいだろう。そうした舞台設定の現在化は、その後続く雄猫ティベールトの発言また海狸パンツァーの訴えに顕著である。

RH (17,4-17;116-133)

「雄猫のティベールトが怒って歩みでて、法廷へ飛び入って言った。『親愛なるわが君、王様、貴方がライナールトにあまりに好意的なので、宮廷には老若問わず、貴方の御前で訴えない者などいないのです。先にこの場で (hier) コルトワが訴えたことは、何年も前に起きたことです。腸詰めはわたしのものでしたが、訴えたりしません。わたしが小狡く腸詰めをせしめたのです。夜中に風車小屋あたりで獲物を追っているときに、眠りこけた粉挽き人から盗みました。それでもコルトワに何らかの権利があるとすれば、それは誰でもなくわたしのお陰なのです。コルトワがここに (nv) 起こした訴えは、採用しないのが一番です。』」

Pg (208,2-16;8,20-28)

「その時雄猫のティベールトが怒って出てきて、こう言いながら法廷へ飛び入った。『わが君王様、ライナールトが貴方の不興を買っていると、ここでは (hier) 聞いています。それゆえこの場 (hier) には、訴えない者などいないのです。先にここで (hier) コルトワが訴えたことは、何年も前に起きたことです。訴えたりしませんが、腸詰めはわたしのものでした。わたしが夜中に風車小屋でせしめたからです。粉挽き人は横になって眠りこけていました。コルトワにここで (hier) 何らかの権利

があるとするれば、それはわたしのお陰なのです。この一件については、いまは沈黙を守るのが彼には一番です。』』

Pgになると、「ここでは」さらに「この場」、すなわち宮廷という舞台がことさら強調されているのが分かる。そして雄猫ティベールの発言につづいて、海狸パンツァーが、兎のクワールトにライナルトが行った恥ずべき行為を訴える。その時クワールトは、RHでは宮廷で向こう側にいたのに対して、Pgでは訴えているパンツァーとともに王様の御前にいるものと想定されている。宮廷の王様の御前であらゆる物事が進行しているという設定なのである。物語上の脇役やさほど意味のなくなった地名が次例のように削除されているのも、物語の舞台をより宮廷に集中させるのに効果的であった。

たとえばイセグリムはライナルトに対する訴えのなかで、狐から受けた度重なる苦しみを「ヘントで作っている布地がぜんぶ羊皮紙であっても、書ききれないでしょう。」(RH16,18;101-103)と表現している。その一方、ヘントが毛織物産業で栄えていたことは、15世紀後半によく知られた事実であったにもかかわらず、Pgではこの一文が丸ごと削除された。

穴熊グリムバルトのライナルト弁護においても、ライナルトと雌狼の不倫関係についてRHでは「その時にエールスウィンデ夫人、あの婦人が愛と宮廷作法に基づいてライナルトに身を捧げたのなら、なんの問題があるでしょう。彼女は満足してすぐに床上げしました。」(20,7-9;246-249)とあるのに対して、Pgでは「その時にライナルトが愛と宮廷作法に基づいてやりたいことをしたのなら、なんの問題があるでしょう。彼女はすぐに床上げしました。」(210,14-15;10,24-26)となっており、エールスウィンデ夫人の名が抜けている。しかもRHではエールスウィンデ夫人が文の主語であるのに対して、Pgではライナルトが愛と宮廷作法に基づいてやりたいことをしたのだと、主語が狐に代わって、雌狼は前面に出てこない。前述した百獣の王ノーベルの名前が省略されたのと同様に、この箇所でも脇役を省いてより一般的な舞台設定をするとともに、狐と狼との対立をより強く前面に押し出そうとする意図が読み取れる。

さらに雄鶏のカンテクレールが死んだ娘コッペを乗せた担架とともに谷を下ってきたとき、担架の両側には二羽の雄鶏が付き添い、一羽はカンテクレールといい「かつてアレンテ夫人の所のよき雄鶏がこの名で呼ばれていた。」(22,1-2;324-325)。RHに語られているこの引用文は、Pgではまるごと削除された。そもそもアレンテ夫人とは誰のことなのか現在ではわからない。当時はまだ理解されていたのだろうが、この一文はたんにカンテクレールを説明しただけのもので本筋とは関係しないので削除されてしまった。また、カンテクレールの子供たちは壁に囲まれた庭を歩き回っていて被害にあったのだという。修道士の納屋が庭にあって、屈強な犬が六匹飼われていた。Pgのこの箇所は「ある頑丈な納屋」(212,14;12,26)に変わっており、誰のことだか分からない修道士も削除された。

その後続く、ライナルトがカンテクレールとその子供たちを騙す箇所では、ライナルトは隠者の格好をしてエルマーレ修道院から持ってきた毛皮の肌着と巡礼用の外套を見せたという。Pgではエルマーレ修道院の記述がない。エルマーレ修道院は、ベルギーのブリュージュ北東にあるスライス(Sluis)という町の東にあったベネディクト会の小修道院を指しており、1144年に当時の新しい干拓地に、ヘントの聖ピータース大修道院との関わりで設立されたものの、多くの洪水、とくに1375年から1376年にかけての洪水によって小修道院そのものが消失した。³⁰⁾したがってPgの成立

した1479年当時でも、修道院が消失してからすでに百年以上が経っている。存在しない修道院の名を本文に残すのは、読者を惑わせるかもしれない、また本筋とは関係のない名称であるので、削除されたと考えるのがふさわしい。

こうして見ると、Pgでは物語の舞台が、前作の連関から切り離されて筋書き上必要な部分のみを残しながら、より宮廷を中心にして描かれているのが特徴的である。また、脇役や本筋に当たらない地名を削除するのは、いわば物語から贅肉を削ぎ落とすようなもので、ライナールトやイセグリムといった主要な登場人物の挙措がより鮮明に描き出されることとなった。

(6)文の簡素化

RHに見られる韻文では、行末の二語を押韻させる必要があるため、自由に単語を選んで文を作れない。本来ならば、使用したくない語であっても、韻を合わせるために使わざるを得ない場合があり、同じ理由から物語の筋とはあまり関係しない文を挿入せざるを得ない場合もある。そのため韻文は、物語の筋が冗長になりやすく、これは韻文の特徴といってもよい。散文では、韻による制約がないので、語の選択や文構造はより自由である。散文化するというのは、たんに韻を踏む二語を変更したり削除したりして韻を解消するだけでなく、こうした韻文のもつ冗長さを解消して物語の筋をはっきりさせることにほかならない。物語の流れに沿いながら、以下に若干の例をあげて説明したい。

RH (16,9-10;72-75)

「イセグリムとその親族が王様の御前に歩みでた。イセグリムが開口一番に話した。」

Pg (207,5;7,16-17)

「イセグリムは親族とともに王様の御前に歩みでて話した。」

RH (18,14-15;185-187)

「その時、穴熊のグリムバルト、ライナールトの兄弟の息子が飛び上がって憤慨して発言した。」

Pg (209,13;9,24-25)

「その時、穴熊のグリムバルト、ライナールトの姉妹の息子が気色ばんで発言した。」

上の二例は、それぞれ新たに登場した動物が発言を切り出した場面である。第一のRHの例では、韻を合わせるために二文で書かれたものを (Jsegrym ende sijn magen/Ghingen voor den coninck staen/Jsegrym begonde zaen/Ende sprac her coninck lieue heer 72-75)、Pgでは一文にまとめて韻の解消を図っている (ISegrym mit sinen magen die ghinc staen voer den coninc ende sprac 7,16-17)。そうするとイセグリムが話したという文になるので、「イセグリムとその親族が王様の御前に歩みでた。」(RH)ではなく、イセグリムが親族とともに歩みでたという表現に変えられた。イセグリムが主体的に訴え出たという印象が強められてもいる。

第二例も同じである。RHでは韻を合わせるために、「その時、穴熊のグリムバルトが飛び上がって」の一文があえて作られたようである (Doe spranc op grymbaert die das/Die reynaerts brueders zoen

was/Ende sprac myt eenre grymmender tale 185-187)。散文の Pg ではこの部分が削除され、物語の流れがよりすっきりとした (DOe sprac grymbaert die dasse ende was reinaerts sijnre suster soen. mit enen toornigen moede 9,24-25)。ただし、新たに登場した動物が発言を切り出したとき、つねに Pg が簡略化をするとは限らない。雄猫のティベールトが発言した条を以下にあげる。

RH (17,4-5;116-118)

「雄猫のティベールトが怒って歩みでて、法廷へ飛び入って言った。」

Pg (208,2-4;8,20-21)

「その時雄猫のティベールトが怒って出てきて、こう言いながら法廷へ飛び入った。」

RH では「法廷へ飛び入って言った Tybert die cater doe voort quam/Al toornich ende spranc inden rynck/Ende seide 116-118」とあるのに対して、Pg では「こう言いながら法廷へ飛び入った ONder dies soe coemt tybert die cater mit toornigen moede. ende spranc inden rinc segghende 8,20-21」のように、本動詞 (seide) が現在分詞 (segghende) に変更されているものの、簡略化されたわけではない。文の意味内容や状況によって簡略にする場合とそうでない場合があるようで、どのような基準に従っているかはさしあたり不明である。

また、グリムバルトのライナルト弁護のなかで、兎のクワールトと子犬のコルトワの訴えに反論する箇所にも簡略化が顕著である。

RH (20,11-15;257-268)

「聖書朗読をしないで、師であるライナルトが弟子に体罰を加えられないなら、それ自体が不当で侵害なのですが、また弟子の素行不良を改めることが許されないなら、率直に申し上げ断言します、彼らは決してまともに学習しないでしょう。コルトワが先ほど、苦勞して美味しい腸詰めを手に入れたと訴えましたが、訴えは却下するのが一番でしょう。そうです、しっかりお聞きでしたか、それは盗まれたものです。彼はどんな学校でも習いませんでした。」

Pg (210,18-211,4;10,31-11,3)

「聖書朗読をまともにしないのに、師であるライナルトが彼に体罰を加えることは許されないのでしょうか。弟子に体罰を加えられないなら、またその素行の悪さを改めことが許されないなら、彼らは決して学習しないでしょう。コルトワが先ほど、苦勞して食糧がほとんど得られなかった冬に腸詰めを手に入れたと訴えました。彼は沈黙した方がよかったです。彼は盗んだからです。」

RH には韻文の特徴がよく出ており、いわば挿入句のような、物語の流れとはあまり関係しない文が添加されている。原文を見ると「そうです、しっかりお聞きでしたか、それは盗まれたものです。Ja hoordi wel sy was gestolen」は一行のなかにあり、「そうです、しっかりお聞きでしたか」は行末にないので、この部分だけは Pg において韻の解消とは関係なく削除されている。いずれにしても物語の筋とはほとんど関係ないので削除された。それ以外はすべて韻の解消を図りつつ、韻文に特有な冗長さ、昔の研究者の言うところの「みすばらしい韻の継ぎ当て」を一掃したものである。³¹⁾ 典型的な文例であると思われるので、原文を挙げて韻文と散文の関係を考察しておく。

RH (257-268)

「Off hi sijn less niet en lass /Reynaert die sijn meyster wass /Most hi sijn scolier niet slaen /Dat waer onrecht ende mysdaen /Ende wennen hem van sijn tuusscherien /Jc segt openbair ic wilt wel lyen /Nvmmer en leerden sy te degen /Nv claecht cortoys dat hi had vercregen /Myt pinen een goede worst /Die clage die wair best geuorst /Ja hoordi wel sy was gestolen /Hi en hads geleert in geenre scolen」

Pg (10,31-11,3)

「Of hi sijn lesse niet te recht en lass. Soude reynaer sijn meester hem niet slaen moeten Soudmen die clerken niet slaen ende van hore bouerye niet wennen nymmermeer en souden si leren Nv claghede cortois dat hij met pynen een worst vercreghen hadde in den wijnter Alsoe dye cost doe nauwe te winnen was daer mocht hi bet of swighen want hi hadse ghestolen」

RHにおいて韻を踏む語は括弧つきで示し、上例の訳で下線部を施した文は、同様に下線によって示してある。最初の二語は、「朗読した lass」と「(師)である (sijn meyster) wass」が韻を踏むのに対して、Pgでは「師である」がライナールトと同格 (reynaer sijn meester) に置かれて韻が解消された。つぎの「それ自体が不当で侵害なのですが Dat waer onrecht ende mysdaen」および「率直に申し上げ断言します Jc segt openbair ic wilt wel lyen」は、韻を構成する二行のうちの片割れで、これがそっくり削除されているのが分かる。つぎに、やはり韻を踏んでいる一方の語「まともに te degen」がPgには見当たらず、韻が解消されている。同様につぎの「腸詰め worst」と「却下する geuorst」の二語が韻を踏んでいるものの、Pgでは文が「彼は沈黙した方がよかったです。daer mocht hi bet of swighen」のように文が書き換えられ、先の「却下する geuorst」は「沈黙する swighen」に変えられて韻が消された。最後の「彼はどんな学校でも習いませんでした。」という韻を含んだ文もそっくり削除されて韻それ自体が解消されている。こうして見ると、Pgにおける散文化とは、韻の解消を図りながら冗長な文を削除して、物語の流れを明確にしていく作業にほかならない。

RH (24,16-25,7;466-494)

「王様はこう言うと、老若問わず誰もが徹夜課を唱えるように命じた。王様の命令は、すぐに実行された。そして『主に嘉せられん』と歌い出され、それに続く歌詞も同様であった。³²⁾ これ以上話すこともできるが、長すぎるかもしれぬ。それに続いた答唱も同様であった。それゆえその文句を省略したい。聖書朗読が詩編や集禱文の朗読とともに終わりに近づき、死者のための祈りが作法どおり読み上げられて、彼女は墓に埋葬された。墓の上には、ガラスのように透明に磨かれた大理石が置かれ、大きな文字が彫られていたので、埋葬されたのは誰であるかがはっきり理解できた。墓碑銘にはこう綴られていた。『カンテクレールの娘、³³⁾ コッペ、かつては卵を巣穴に産みおとし、足で地面を搔くことのできた最高の鶏、この墓石の下に眠る。ライナールト、あの冷血漢が不法にも彼女を奸計にはめて噛み殺した。みな彼女をいっそう悼むように、世界中がこの一件を知るべし。』墓碑銘はこう終わっていた。」

Pg (215,5-10;14,20-31)

「即座に王様は、老若問わず誰もが徹夜課を唱えるように命じた。『^{くに}国にありて、^{しゆ}主に^{よみ}嘉せられん』と歌い出され、³⁴⁾ それに続く歌詞も同様であった。これ以上話すべきなのだろうが、口に出すには長すぎるかもしれぬ。この徹夜課と死者のための祈りが終わると、彼女は墓に埋葬された。墓の上にはガラスのように透明な大理石が置かれ、大きな文字でこう彫られていた。『良きコッペ、狐ライナールトが奸計にはめて噛み殺したカンテクレールの娘がこの墓石の下に眠る。非業の死を遂げた彼女を悼むべし。』」

雄鶏カンテクレールの娘で、ライナールトによって噛み殺されたコッペのために、王様が死者のためのミサを執り行うよう命じ、コッペが墓碑銘とともに墓に埋葬された一節である。死者のためのミサとコッペが墓碑銘付きの墓に埋葬されたという話が物語の主要部をなしている。上例のようにやや長く引用してみると、主要部そのものはPgでそのまま残る一方、それを脚色している周りの部分は大幅に削除されているのが分かる。邦訳で換算すると、同じ一節がRHでは九行を占めるのに対して、Pgでは五行しかなく、ほぼ半分の分量に短縮された。たしかに死者のためのミサには、答唱ならびに聖書朗読、詩編や集禱文の朗読があるものの、³⁵⁾ それらはミサの内容を説明しているだけで、物語の本筋とは関係しない。Pgはそうした箇所を「この徹夜課と死者のための祈りが終わると」という簡潔な一文にまとめている。墓碑銘にしても同様に、「かつては卵を巢穴に産みおとし、足で地面を搔くことのできた最高の鶏」というのは、コッペの詳しい特徴描写には有益かもしれないが、物語の本筋をより重視するPgの作者にとってあまりに冗長に受け取られたのだろう。「世界中がこの一件を知るべし。」という要請が「非業の死を遂げた彼女を悼むべし。」のなかに包摂され、たんに墓碑銘の説明に過ぎない「墓碑銘はこう終わっていた。」という末尾の文言が削除されたのも、同様の意識に基づくものだろう。その結果Pgは、脚色された部分が除かれ、物足りないと思わせるぐらい物語の流れがすっきりした印象を与える。

(7)結論

以上、『狐ライナールト物語』の冒頭における様々な改変について考察を加えた。すでに序において、トポスをちりばめた中世の伝統的な序の体裁から訣別し、不特定多数の読者の興味を惹くために序が一新されたのが確認できた。それは本の魅力と効用を宣伝するためでもあり、ここに写本から印刷本へと、すなわち朗読されたものを聞くという書物から読む書物へと、本のもっている機能の転換がはっきり現れている。同様に、冒頭における自然描写が簡素化され、物語における時節が一般化された。百獣の王の名前を挙げないことも、こうした一般化と関係するだろう。

前作の『ライナールト物語』によると、狐が参内しないのは宮廷でたくさん悪事をはたらいたからだという。ところが、『狐ライナールト物語』でライナールトが宮廷に来ないのは、やってくる沢山の動物に対して罪の自覚があったからだというように、参内しない理由が変更された。物語における対立の図式がライナールト対宮廷から、ライナールト対他の動物という図式に変わったという点で、この変更は重要である。宮廷はもはやこうした対立の中心に位置することなく、ライナールト対他の動物という対立が軸となって物語が展開していくことが可能となったからである。それとともに物語では、悪役としてのライナールトが強調されて対立の図式が鮮明になる一方、狐の甥で

ある穴熊グリムバールトはより熱心にライナールトを弁護しつつ、他の動物たちにいっそう非難の矛先を向ける。対立を鮮明に打ち出すことによって、読者の注意をより物語に向けさせて緊迫感を高めるという意図があったと考えられる。

そうした効果は、先行する作品で言及された様々な事件を、物語のあら筋に合わせて改変することでも得られる。ライナールトが狼の女房を誑かしたという『狐物語』で語られた事件も、ベーコンが懸かっていた縄の一件も『狐ライナールト物語』ではもはや語られない。また、宮廷の場において「ここでは」あるいは「この場」という語が多用され、さらに物語上の脇役やさほど意味のない地名が削除されて、物語の舞台を前作から切り離して、この『狐ライナールト物語』における宮廷に焦点を合わせたことがわかる。

『狐ライナールト物語』では、上述したさまざまな改変を行いながら、それと同時に韻文を散文に変えていかねばならなかった。韻の解消を図るとするのは、韻文に特有の冗長さをなくして文を簡素化することにほかならない。こうした種々の改変を同時に行って韻文のテキストを散文に改編して印刷本として販売するというのは間違いなく革新的な事業であり、そのための確かな意図が物語に見られるさまざまな改変に窺われるのである。

注

- 1) たとえば Wackers/Verzandvoort 1989:154 を参照されたい。
- 2) Schlusemann 1991 を参照されたい。
- 3) 以下トボスに関しては Reinaert de Vos 1999:pp.10 参照。
- 4) 以下、『ライナールト物語』は RH、『狐ライナールト物語』は Pg と研究上の通例にしたがって略号による表記とした。また引用箇所については、左側にある最初の数字が邦訳『狐の叙事詩』にある対応する頁と行、つぎの右側の数字が原典 (CD-ROM Middelnederslands 1998) における対応する行、Pg の場合は Muller/Logeman 1892 における頁および行を示した。
- 5) ただし、「たびたび夜更かし」をしたのは、マドックを制作するためであって『ライナールト物語』のためではない。ここに作者の皮肉がある。
- 6) Sonnemans 1995:deel I,149。
- 7) Pg の序の全文をあげておく。「ここに狐ライナールトと題された本書の序がはじまる。ここに狐ライナールトの物語または様々なたとえ話がはじまる。この物語には、たくさんの素晴らしい教訓や大切な戒めが種々のたとえ話によって記されています。この戒めによって、顧問団のお歴々や、聖俗両界のお偉方たち、商人さらに民衆のあいだで日々実践され活用されている巧妙な計略を知ることができます。また本書は、すべての善人の役に立ち、利益になるように作られています。日々世の中で行われている右にあげた巧妙な奸策を、読みながら理解して習得するためです。それを活用するためではありません、誰もが用心してそれを回避し、また悪人に騙されないようにするためです。また、完全に理解したい者は誰でも、何度もこれを読んで、読んだことに細心に気をつけなければなりません。というのも、読めばすぐに察せられるように、たいへん巧妙な構成をとっているからです。一度通読しても正しい意味や正しい意図がわからないなら、何度も通読するとよく理解できるでしょう。知恵ある者にとっては、とても愉快で有益でもあります。」『狐の叙事詩』 p.206 参照。
- 8) 『狐の叙事詩』 pp.467 参照。
- 9) van Daele 1994:287 脚注参照。
- 10) 原文をあげておく。下線を施した語が韻を踏んだ語である。RH (16,1-5;45 – 52):Het was op enen pijnxster dach/ Dat men woude ende velde sach/ Groen staen myt louer ende grass/ Ende menich vogel blide wass/ Mit sange in hagen ende in bomen/ Die crude sproten wt ende die bloemen/ Die wel roken hier ende daer/ Ende die dach was schoon ende clear; Pg (206,12-207,1; 7,1-3): Het was omtrent pinxteren also dattet wout dan gaerne lustelic gestelt plech te wesen. van loueren bloeseme bloemen

wel rukende ende mede van voghelen ghesanghe.

- 11) ヨハネによる福音書 3:20-21 による (Schlusemann/Wackers 2005:5)。「悪を行う人は光を憎み、その行いが現れることを恐れて光のほうに来ないが、真理を行う人は、神によってそのことの行われていることを現すために光のほうに来る。』『聖書』フェデリコ・バルバロ訳による。
- 12) RH (19,2-20,4;199-238) 参照。
- 13) Pg (209,17-210,11;9,31-10,19) 参照。
- 14) RH (20,5-9;240-251) および Pg (210,12-16;10,21-27) を参照されたい。
- 15) 押韻している語を下線部によって示した。
- 16) 一族の結束や一族の繁栄と、他の一族に対する反目を強調するのは RH の後半に確認される物語上の特徴であり、それが成立した 15 世紀の第 2 四半分期のブルゴーニュ公国の世相を反映している。これと同じ傾向が Pg の冒頭から顕著であることを指摘しておくのも無益ではないだろう。
- 17) 『狐物語』の当該箇所は以下のとおりである。「『いともかしこき陛下よ、／畏れながらわが妻エルサンに／ルナルめが働きました姦淫の裁きを／願ひ上げます。／あ奴はすみかのモーベルチュイで／わが妻を手籠めにいたし、子供たちの頭から／小便をひっかけおったのです。／身どもにとってこれほどつらい苦しみはありません。』『狐物語』第一詩篇参照。鈴木覺・福本直之・原野昇訳『狐物語』所収の「ルナルが熊のブランに蜂蜜があるとだました話」p.135 参照、また『狐物語』山田齋・新倉俊一訳所収の「ルナルの裁判」p.398 参照。もしも「あまりの屈辱と深刻な被害を何度となく蒙りました。」の一文が『狐物語』にあるとするなら、「願ひ上げます」の後に入ったはずである。「様々な狐の狼藉」はたとえば第一詩篇にある「イザングランに対する悪行の数々はどこの法廷に出ても否認できないほどです。」というルナルの懺悔のなかにある悪行を指している(前出『狐物語』p.159)。また Bouwman 1991:1:pp.57, 2:pp.432 参照。
- 18) 『狐物語』第二詩篇参照。『狐物語』山田齋・新倉俊一訳所収の「ルナルとイザングラン夫妻(狼)」pp.380 参照。また『狐物語の世界』pp.34 参照。本文は著者による要約である。『狐の叙事詩』pp.402 参照。もともとは 12 世紀中頃に成立した『イセングリムス』第八話にある話である (Nieuwenhuis 1997:pp.158)。また丑田弘忍訳『イセングリムス』pp.211、Kuiper 1984:pp.87 参照。
- 19) 内容的に性をテーマにした箇所はもはや評価されなくなったという指摘も軌を一にするものである (Wackers/Verzandvoort 1989:170、また p.166 参照)。
- 20) 『狐物語』第五 a 詩篇参照。『狐物語』鈴木覺・福本直之・原野昇訳所収の「イザングランの告訴」p.96-133 参照。
- 21) 『狐の叙事詩』pp.403 参照。
- 22) Bouwman 1991:1:57-58 参照。
- 23) 「噛んでみる、じつに脂が乗っているぞ Becnaget die, si es wel vet」は校訂によって変更された部分である (Wackers 2002:23,418)。原文は「お前が尻から出したもの(ペーコン) Dien liet gi lopen door v zet」で、ここでは校訂による変更を採用した。
- 24) 『狐物語』2 鈴木覺・福本直之・原野昇訳 pp.60-64 参照。もともとは『狐物語』に先行する『イセングリムス』第一話にある話。とくに丑田弘忍訳『イセングリムス』pp.22 を参照されたい (Voigt 1884 (1974):pp.26)。
- 25) 『狐の叙事詩』pp.405 参照。また Bouwman 1991:1:pp.70 参照。
- 26) Hellinga 1952:16 また Bouwman/Besamusca 2002:21 参照。「わたしが貴方に語るより百度もありました。Ende ondert waerven meer dan ic hu rijme 232 行」(Bouwman/Besamusca 2002:21)
- 27) 『狐物語』第一詩篇山田齋・新倉俊一訳所収の「ルナルの裁判」p.411。
- 28) Bouwman 1991:pp.72.
- 29) 「もっと苦しいこと noch in meerre pijn 238 行」とここで比較級を使うのは、たしかに伝承に沿っている。前述の『狐ライナルト譚』の同じ箇所でも比較級が使われ (Ende ondert waerven meer dan ic hu rijme 前出 232 行)、ラテン語版の『ライナルドゥス ヴルペース』でも同様である(「もっと悪辣で重大な打撃を彼は狼から蒙った。Graviora/hiis et maiora sustulit ille lupus 109-110 行 Huygens 1968:46」。ただそれによって、もっと苦しい別の事件があったように連想させるので、そうした連想を惹起させる文が

Pg では削除されたと考えられる。

30) 『狐の叙事詩』 p.191、p.383 参照。

31) RH6270 行にある「ご承知ください gi sult weten」についての寸評 (Martin 1874:402)。「みすぼらしい韻の継ぎ当て elender Reimflicken」という評は韻文に関しての当時の時代思潮を反映している。しかしながら、そこまで酷評するには及ばない。たんに韻文の特徴と考えるべきである。

32) 死者のためのミサは、晩課 (vespers) および徹夜課 (vigils)、賛課 (lauds) から構成される。最初は晩課からはじまるので、王様が唱えるようにと命じた徹夜課とは順序が異なる。あえて間違った順序で挙げているのか、あるいは Schlusemann/Wackers が指摘するように徹夜課によって死者ミサ全体を表現しているのかよくわからない (Schlusemann/Wackers 2005:28 脚注)。死者のためのミサは晩課最初の placebo domino 「主に嘉せられん」の歌によって開始される。また、この文言はウルガタ訳聖書の詩編 114,9 の文言 placebo domino in regione vivorum 「我は生ける者の国にありて、主に嘉せられん」(光明社訳) から取られたもの。詳細は『狐の叙事詩』 pp.172 参照。

33) 原文では wijff「妻」。ここは Wackers による校訂にしたがって dochter「娘」とした (Wackers 2002:36)。

34) 原文はラテン語 placebo domino in re. 「国にありて、主に嘉せられん」最後の部分の in re. は原文にある regione の最初の部分だとして (Muller/Logeman 1892:162 参照)。死者のためのミサは晩課最初の placebo domino 「主に嘉せられん」の歌によって開始される。また、この文言はウルガタ訳聖書の詩編 114,9 の文言 placebo domino in regione vivorum 「我は生ける者の国にありて、主に嘉せられん」(光明社訳) から取られたもの。詳細は『狐の叙事詩』 pp.365 参照。

35) 注 32 参照。ただ、ハーバーによれば答唱ならびに聖書朗読、詩編や集禱文の朗読があるのは徹夜課のみだとされるので、そうだとすれば徹夜課によって死者ミサ全体を表現していると想定できる (Harper 1991:pp.105)

参考文献

Bouwman 1991: A. Th. Bouwman, *Reinaert en Renart. Het dierenepos Van den vos Reynaerde vergeleken met de Oudfranse Roman de Renart*. 2dln. Amsterdam 1991.

Bouwman/Besamusca 2002: A. Bouwman/B. Besamusca. *Reynaert in Tweevoud Deel I Van den Vos Reynaerde*. Amsterdam 2002.

CD-ROM *Middelnederlands*. Den Haag/Antwerpen 1998.

van Daele 1994: Rik van Daele, *Ruimte en naamgeving in Van den Vos Reynaerde*. Gent 1994.

Harper 1991: John Harper, *The forms and orders of Western liturgy from the tenth to the eighteenth century*. A historical introduction and guide for students and musicians, Oxford 1991.

Huygens 1968: R.B.C. Huygens, *Reynardus Vulpes. De Latijnse Reinaert-vertaling van Balduinus Iuvenis*. Critisch uitgegeven en vertaald door Dr. R.B.C. Huygens, Zwolle 1968.

Hellinga 1952: W. Gs. Hellinga (ed.), *Van den Vos Reynaerde. Deel I Teksten*. Diplomatisch uitgegeven naar de bronnen vóór het jaar 1500, Zwolle 1952.

『イセングリムス—狼と狐の物語—』丑田弘忍訳 東京 2014年 鳥影社

『狐物語』鈴木覺・福本直之・原野昇訳 東京 一九九四年 白水社

『狐物語』山田喬・新倉俊一訳 筑摩世界文学大系一〇 『中世文学集』 一九八三年 筑摩書房

『狐物語』2 鈴木覺・福本直之・原野昇訳 広島 二〇〇三年 溪水社

『狐物語の世界』原野昇・鈴木覺・福本直之著 東京 一九八八年 東京書籍

『狐の叙事詩』『ライナールト物語』『狐ライナールト物語』檜枝陽一郎編訳・読解 2012年 言叢社

Kuiper 1984: Willem Kuiper, *Dat hi mijn wijf hevet verhoert (A73)*. In: *Ic ga daer ic hebbe te doene*. Opstellen aangeboden aan prof.dr.F.Lulofs ter gelegenheid van zijn afscheid als hoogleraar in de Nederlandse Taal- en Letterkunde aan de Rijksuniversiteit te Groningen. Ed. Drs. J.J.Th.M. Tersteeg/P.E.L. Verkuyl. Groningen 1984.

『舊約聖書』ウルガタ全譯第三卷 札幌 一九五七年 光明社譯

Martin 1874: Ernst Martin, *Reinaert Willems gedicht van den Vos Reynaerde und die Umbearbeitung*

- und Fortsetzung *Reinaerts Historie*. Paderborn 1874.
- Muller/Logeman 1892: J.W.Muller/H. Logeman, *Die Hystorie van Reynaert die Vos, naar den druk van 1479*, vergeleken met William Caxton's Engelsche vertaling. Zwolle 1892.
- Nieuwenhuis 1997: *Ysengrimus*. Uit het Latein vertaald door Mark Nieuwenhuis, Amsterdam 1997.
- Reinaert de Vos 1999: *Reinaert de Vos*. samengesteld door Hubert Slings, Amsterdam 1999.
- Schlusemann 1991: Rita Schlusemann, *Die hystorie van reynaert die vos und The history of reynard the fox. Die spätmittelalterlichen Prosabearbeitungen des Reynaert-Stoffes*. Europäische Hochschulschriften Reihe 1. Frankfurt am Main/Bern/New York/Paris 1991.
- Schlusemann/Wackers 2005: Rita Schlusemann/Paul Wackers, *Reynaerts historie*. hrsg.und übersetzt von Rita Schlusemann und Paul Wackers, Bibliothek mittelniederländischer Literatur, Band 2, Münster 2005.
- 『聖書』フェデリコ・バルバロ訳 第一八刷 東京 二〇一〇年 講談社
- Sonnemans 1999: Gerard Sonnemans, *Functionele aspecten van Middelnederlandse versprologen*. 2 dln. Boxmeer 1995. [Proefschrift Nijmegen]
- Voigt 1884 (1974): *Ysengrimus*. Herausgegeben und erklärt von Ernst Voigt, Halle a. S. 1884, Reprographischer Nachdruck der Ausgabe Halle 1884, Tübingen 1974.
- Wackers 2002: Paul Wackers, *Reynaert in Tweevoud Deel II Reynaerts Historie*. Amsterdam 2002.
- Wackers/Verzandvoort 1989: Paul Wackers/E. Verzandvoort, *Bewerkingstechniek in de Reynaerttraditie*. In: *Tijdschrift voor Nederlandse Taal- en Letterkunde* 105 (1989) 152-181.

(本学文学部教授)